

【一般入試 編】英語外部検定 入試利用大学が倍増！

TEAP の採用率 25.5 ポイントアップの急増！

旺文社 教育情報センター 28 年 11 月 30 日

大学入試の英語科目に代わる試験として注目を浴びている「英語外部検定」。先日掲載した【推薦・A0 編】に続き、【一般入試編】として平成 29 年度の一般入試での外部検定の利用状況を昨年度調査と比較しながら見てみよう。

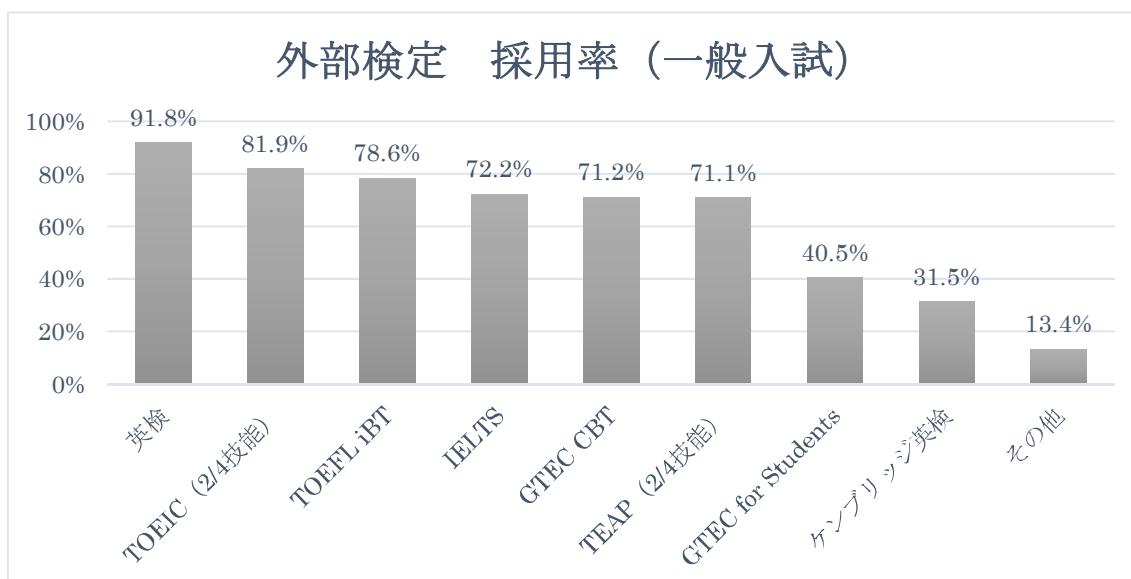
今回、外部検定を一般入試に利用する大学は 110 大学、全 764 大学のうち 14%が利用する。設置者別に見ると、国公立大が 14 大学（昨年度 9）、私立大 96 大学（昨年度 41）となる。一般入試で外部検定が利用されはじめて 3 年目の 29 年度は利用大学が倍増した。

文部科学省でも、センター試験の後継とされる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の英語科目では、「読む」「聞く」に加え「書く」「話す」の英語 4 技能測定のために外部検定の活用を検討している。これから大学入試で 4 技能の測定が求められるにつれ、外部検定を活用した入試方式がさらに増加していくことだろう。

【推薦・A0 編】については以下をご覧ください。

http://eic.obunsha.co.jp/pdf/exam_info/2016/1110_1.pdf

●全ての外部検定で採用率が上昇、最大の伸び幅は「TEAP」で 25.5 ポイント増



※各大学にて外部検定を利用している入試方式（一般入試）を 100 とし、それぞれの外部検定が採用されている割合を算出。

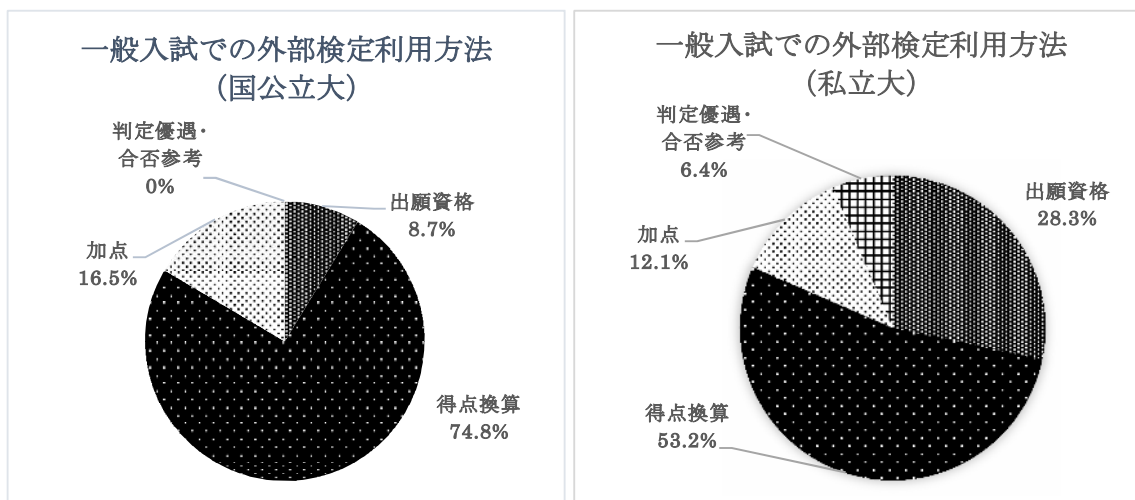
※原則、学科単位で集計。1 つの学科で複数の入試方式がある場合、外部検定の利用内容が同じなら「1」、異なるなら別々に計上。

※各外部検定の採用については募集要項に記載されているものを全て計上。「それに準ずる外部検定でも出願可」のような記載の場合は、上記全ての外部検定が採用されているとしてカウント。募集要項の文面から記載以外が有効と読み取れない場合は採用としていない。

こちらのグラフは、29年度一般入試で外部検定を利用する110大学での、各外部検定の採用率をまとめたものだ。昨年度と比較して採用率の順位には大きな変動はない。ここで注目すべき点は、全ての外部検定の採用率が大きく向上している点だ。今までは英検、TOEFL iBT、TOEICの3大検定を利用する大学が多かったのに対し、29年度は他の外部検定も併せて利用するようになっている。これは28年3月に文部科学省で開かれた「平成27年度英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」の配付資料で「主な英語の資格・検定試験」として、これらの外部検定が掲載されたことが影響していると考えられる。文部科学省がこの資料で異なる外部検定の級やスコアを横並びに比較してレベルの統一を行ったことが、大学に多くの外部検定を利用しやすくしている。

推薦・AOで採用率を大きく伸ばしたTEAPだが、一般入試でも昨年度比で25.5ポイントアップの最大の伸び幅となっている。ここからも、大学入試専用試験として多くの大学で認知されてきていることが分かる。TEAPは学習用書籍や対策講座も増えはじめ、受験者側にとっても検定を利用しやすくなってきている。検定を開始してから3年目に入り、徐々に多くの大学と受験者に根付いてきているといえる。

●利用方法は国公立大、私立大ともに「得点換算」と「加点」が増加



※それぞれの入試で外部検定を利用している大学（国公立大=14大学、私立大=96大学）の中での割合。

※各項目の例 【出願資格】「英検2級以上を出願要件とする」など。

【得点換算】「英検準1級以上の者はセンター（個別）試験英語を満点とする」、「英検2級以上の者は資格レベルに応じてセンター（個別）試験英語の点数に換算する」など。少数だが「試験免除」もここに含む（「英検2級以上の者は英語試験（個別）を免除する」など）。

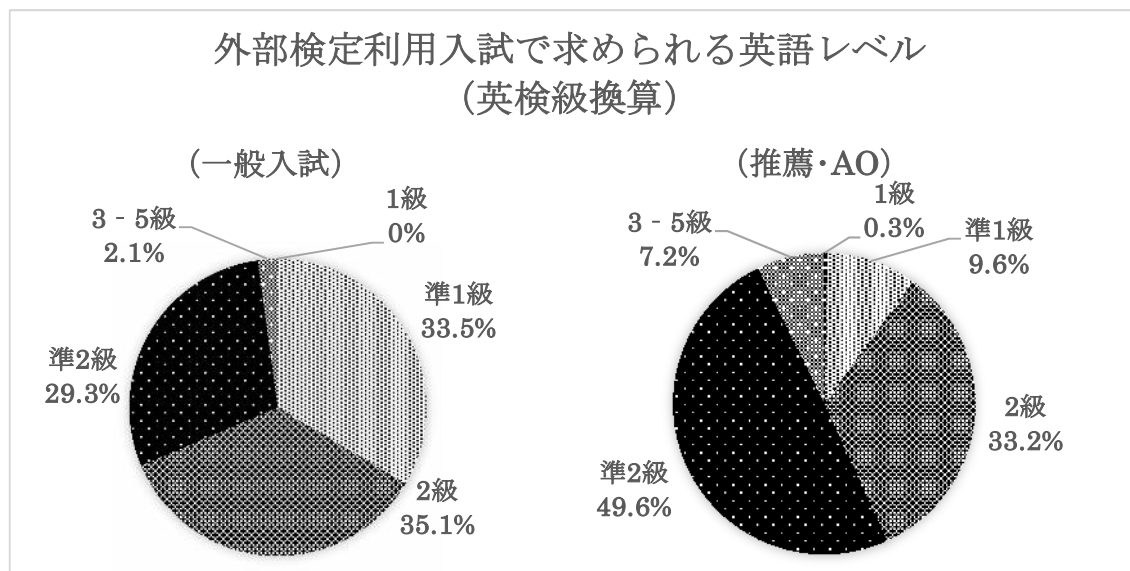
【加点】「英検2級以上の者は点数化し個別試験の結果に加点する」など。

【判定優遇・合否参考】「英検2級以上の者は合否判定の際に優遇する」など。

ここでは外部検定がどのように利用されているのかを見てみよう。昨年度と比較すると国公立大、私立大ともに「出願資格」の割合が減少、「得点換算」と「加点」が増加している。推薦・AOでは「出願資格」で受験生の最低限の英語レベルの担保することが多かったが、一般入試では「得点換算」、「加点」で英語力の高い受験生を優遇、選抜したいという意図が垣間見られる。大学はより高い英語力を持った学生を確保するため、さまざまな方式の外部検定利用入試を考え出し、実施している。

国公立大で「得点換算」の割合が昨年度の 42.3%から大きく伸びているのは、今回から鹿児島大の全学部と九州工大の情報工学部で「得点換算」を導入したことが大きく影響している。今後、国立大においても外部検定利用入試がどこまで広まってくるのか、またその利用方法についても注目だ。

●一般入試で求められるレベルは推薦・AO よりも高め。準2～準1級まで幅広いレベル



※募集要項の記載に級・スコアの指定が無いものは除く。

※外部検定の級・スコアに応じて段階的に優遇を行う場合、最易級のみを集計。

各入試で求められる外部検定のレベルを表したものが上のグラフだ。【推薦・AO編】と同様、文部科学省発表のCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）を基準とした外部検定対照表を使用して各検定レベルを統一、英検級に換算した。

一般入試と推薦・AOを比較すると、推薦・AOでは準2～2級が多く求められているのに対して、一般入試では準2～準1級といった、より高く広い範囲のレベルが求められているのが分かる。これは昨年度の調査でも同じ結果となっている。推薦・AOでは外部検定は「出願資格」として最低限の学力の担保に利用されることが多く、求められる英語力はそれほど高くない。対して一般入試では学力に注目して選抜を行うため、優遇のためにはより高い英語力が求められている。

一般入試で求められるレベルの割合を比較すると、昨年度は高校卒業程度とされる2級レベルだけで50%を占めていたのに対し、29年度は準1級と準2級の割合が増加し、準1、2、準2の各級とも30%前後となっている。

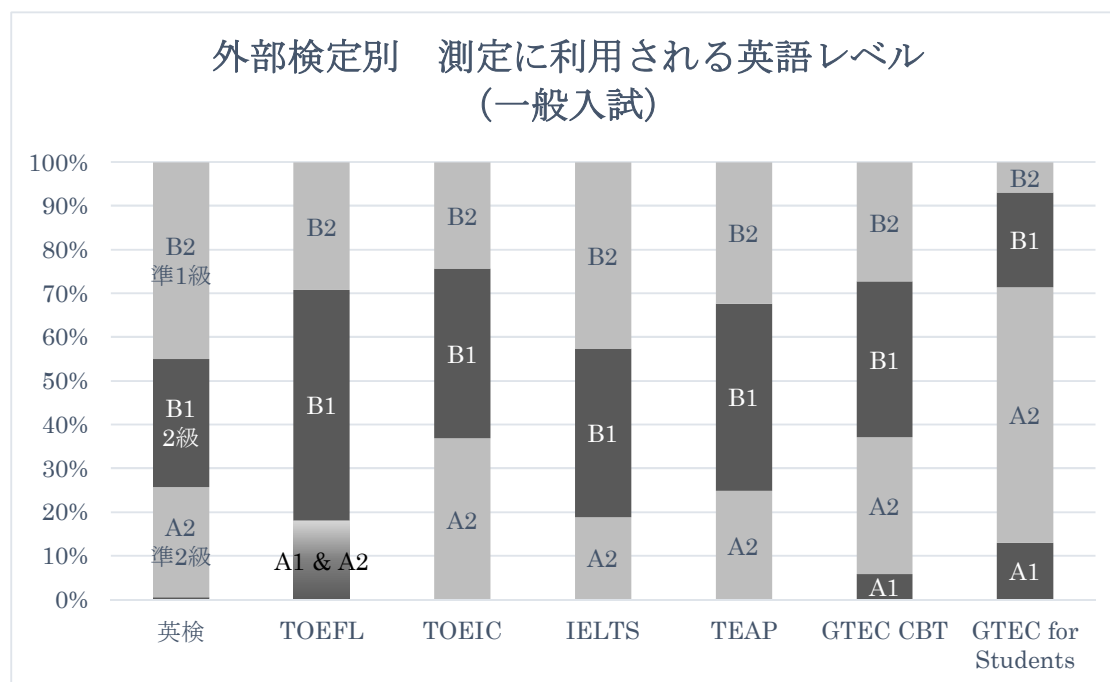
この変化について詳細を見ると、大学中級程度とされる準1級が増加したのは、難関大や中堅大で「みなし満点」のみ設定する大学が増えたからだ。これは「得点換算」の中でも満点に換算する級やスコアのみを設定する優遇措置で、ハードルは高く設けられる。対して高校中級程度の準2級が増加したのは、一部の難関大で「出願資格」、中堅大とそれより下位の大学で「5点加点」や「80点に換算」といった、比較的ハードルが低めの優遇措置が拡大したことによる。29年度は幅広い英語レベルの受験生に対して出願資格から得点換算（みなし満点）まで、手厚さの異なる方法でメリハリつけた優遇が実施されるようになっている。

●受験生にとって安心感の強い外部検定利用入試

29年度の外部検定利用入試で「得点換算」と「加点」が増加しているのは、前述のグラフで説明したとおりだ。これにより外部検定を持つ受験生は、多くの入試で手厚い優遇を受けられるようになった。その中でも29年度の傾向としてあげられるのが、段階的な「得点換算」を実施する入試方式が多く導入されたことだ。「得点換算」には満点にだけ換算される場合と、資格レベルに応じて段階的に換算する方式がある。例えば、英検準1級だけを満点に換算する方式に対して、英検準1級→満点、2級→90点、準2級→80点と資格レベルに応じて得点換算を行うものである。両者を比べると、後者のほうが受験生にとって外部検定利用に対するハードルが下がり、より活用しやすくなるのは明らかだ。

「得点換算」方式では、事前に入試の得点を確保できるのに加え、本番の試験も受けられる大学もある。この方式では外部検定の得点換算と入試本番の得点を比較して、よい方の得点で合否判定されるので受験生にとっては一層安心だ。

●一般入試に求められる英語レベルはA2～B2。TEAPのバランスが改善



※募集要項の記載に級・スコアの指定が無いものは除く。

※外部検定の級・スコアに応じて段階的に優遇を行う場合、最易級のみを集計。

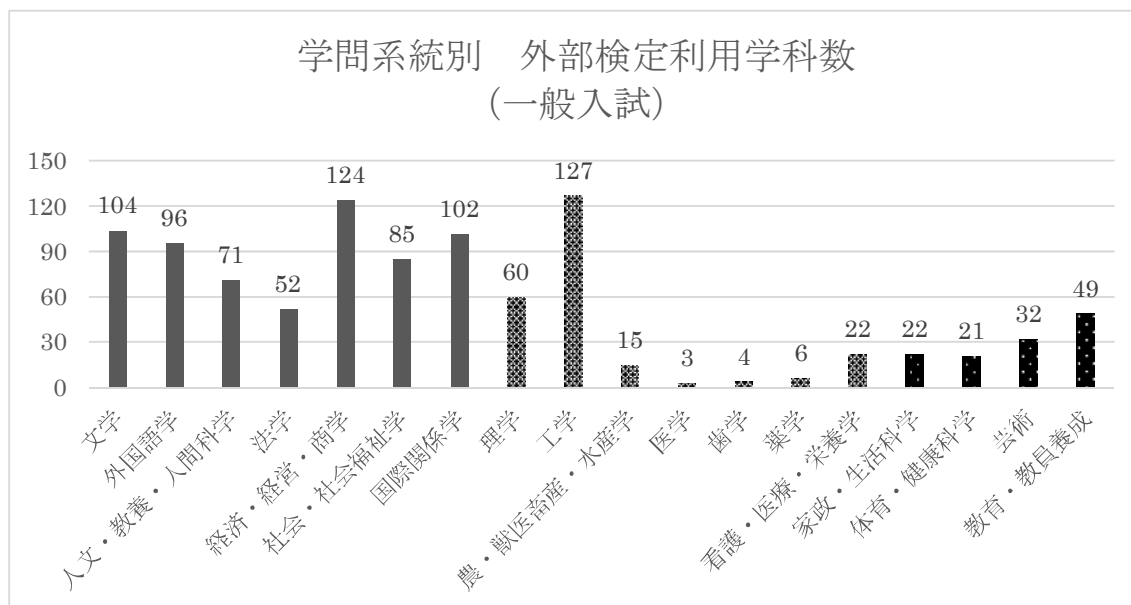
このグラフは一般入試で採用される各外部検定が、どの英語レベルの測定に利用されているかを表したものだ。こちらでも文部科学省発表の外部検定対照表を使用して、各外部検定をCEFRレベルで比較している。

一般的に大学入試で求められる英語レベルは、CEFRレベルのA2からB2までとされる(英検準2～準1級に相当)。こうして見ると各レベルの割合は外部検定ごとで若干異なるが、ほとんどがA2～B2レベルの測定に利用されている。海外留学のための英語力を測定するTOEFLがその特性上、測定するレベルがB1以上と上位レベルに集中しているのと、GTEC for Studentsについては受験の対象を中学生からとしていることから、大学入試よりも易しいレベルの測定での利用が多い。昨年度の調査ではB1レベルでの利用に偏ってい

た TEAP は、採用大学を増やすことで幅広いレベルの測定に利用されるようになった。

今後、注目すべきは受験生が実際にどの外部検定を利用して大学に出願するのかである。受験生に対しては受験しやすさ、大学に対しては結果の正確性など、入試利用において外部検定に課せられる期待と責任は決して小さくない。

●学科ごとの集計では工学系統学科での利用が最多



※学問系統は螢雪時代4月臨時増刊における各大学からのアンケート回答に沿って分類。

※外部検定を入試利用している学科を計上、同一学科で複数の外部検定利用入試を実施する場合も「1」と計上。

※学問系統が複数にまたがる場合、両系統に計上（例：国際経営学→「経済・経営・商学」「国際関係学」系統の両方に計上）。

29年度の一般入試で外部検定を利用している大学の学科を学問系統別に仕分けしたのが上のグラフだ。最も多く外部検定を利用している学問系統は、文系系統の学科を抑え「工学」系統がトップとなった。「外国語学」「国際関係学」系統の学科で英語が求められることは想像に難くないが、「経済・経営・商学」や、ひいては理系系統の「工学」系統でここまで多く外部検定が利用されていることは注目すべき結果だ。「工学」系統は学科が細分化されているためそもそも学科数が多いこと、また「経済・経営・商学」系統は設置している大学数が多いことが大きく影響してはいるが、それを勘案したとしても、これらの学問系統における英語の重要性が感じられる。「工学」「経済・経営・商学」の専門知識に加え、卒業後に実務を行う上で英語力も必要なスキルと考えられているのだろう。

またここでも、鹿児島大一工、九州工業大一工、情報工が29年度から外部検定の利用を開始したことが大きく影響している。この点からも、国立大の理系系統学科を目指す受験生にとって「英語力」が見逃すことのできないものになってきていることが分かる。

●外部検定を利用した特徴的な入試方式

一般入試で外部検定が活用されるようになって実質3年目となる29年度、各大学では優秀な英語力を持った学生獲得のため、さまざまな入試を実施している。以下に特徴的な入試方式をいくつか紹介しよう。

<青山学院大学>

文学部 英米文学科 C方式 「出願資格」

TEAP			
Reading	Listening	Writing	Speaking
65	65	65	65
総合点:280			

この入試方式ではTEAPが採用され、総合点280点だけでなく、各技能65点も出願資格として設定されている。英語4技能の育成が重要視される中、外部検定を利用した入試では、このように総合点と併せて4技能それぞれにクリアしなければならない点数(基準点)を設定することがある。これはバランスの取れた英語力を身につけた学生の選抜を意図した方式だ。

各技能の基準点について注意が必要なのが、総合点は必ずしも各技能の点数の合計ではないということ。受験生は出願にあたり4技能全てにおいて最低65点を越えながら、かつ総合点280点以上のスコアが必要となる。

また、こちらの入試方式には以下の注意書きが付け加えられている。

※「TEAPを複数回受験した場合、各技能の最高点を組み合わせた総合点で出願することができます」

これは例えば、1回目の受験でReading、Listening、Speakingにおいて基準の65点をクリアし、2回目の受験でWritingの65点をクリアした場合、各技能の最高点(1回目のReading、Listening、Speaking、2回目のWriting)を組み合わせて出願することができること意味する。

TEAP 受験1回目				TEAP 受験2回目			
Reading	Listening	Writing	Speaking	Reading	Listening	Writing	Speaking
75	75	60	65	70	70	65	60
総合点:275				総合点:265			

受験1・2回目から各技能最高点を組み合わせ			
Reading	Listening	Writing	Speaking
75	75	65	65
総合点:280			

<立命館大学>

国際関係学部 国際関係学科 IR方式(英語資格試験利用型)「出願資格」+「得点換算」

	英検	IELTS	TOEFL iBT	GTEC CBT
100点換算	準1級	5.5	71	1150
90点換算		5.0	61	1050
80点換算 (出願資格)	2級	4.5		1000

立命館大の特徴は「出願資格」と「得点換算」を組み合わせている点だ。「出願資格」として英検 2 級、IELTS-4.5、GTEC CBT-1000 を課している。このレベルを英語外部資格試験の 80 点に換算し、それ以上の級・スコアを持っている受験生に対しては 90 点換算、または 100 点換算した上で合否判定を行う。外部検定を「出願資格」として利用する場合、基準レベル以上の受験生は同等に扱われるため、英語がずば抜けて得意な受験生でも有利にはならない。この立命館大の「出願資格」+「得点換算」方式では、受験生の最低限の英語レベルを線引きしながら、それ以上の英語力を持った受験生も優遇できる方式になっている。

<学習院大学>

国際社会科学部 国際社会科学科 B方式 「出願資格」+「得点換算」

換算得点	英検	TEAP	IELTS	TOEFL iBT	TOEIC	ケンブリッジ英検	GTEC CBT
200	1級	390	7.0	100	1300	CAE	1400
180	準1級	290	6.0	70	1030	FCE	1100
160	-	270	5.5	62	910	-	1030
140	-	255	5.0	54	840	-	950
120	2級A	220	4.5	48	700	-	800
100 (出願資格)	2級	210	-	42	650	PET	700

この入試方式は前述の立命館大と同様、「出願資格」+「得点換算」を行う方式だ。英語試験は実施せず、外部検定の換算得点と他教科の合計点で合否判定を行う。学習院大の特徴は利用できる外部検定が多い点と、換算得点を細かく刻んでいる点だ。利用できる外部検定が多いのは受験生にとって大きなメリットといえる。また、資格レベルを詳細に刻んでいるのも英語が得意な受験生にとって、他の受験生と差をつける点で有利にはたらくだろう。

目標スコア取得まで複数回受験できるのが外部検定のメリットだが、学習院大の方式のように資格レベルに応じて細かく換算することは、少しでも高得点を取得するため英語学習に励む受験生の努力に報いる点で、優れた優遇方式といえる。

以下の早稲田大と明治大は本年 5 月の記事でも掲載した入試方式だ。29 年度入試の特徴となる英検 CSE スコアを利用した入試としてあらためて紹介する。

<早稲田大学>

文化構想学部・文学部 英語 4 技能テスト利用型 「出願資格」

早稲田大は 29 年度入試より一般入試（英語 4 技能テスト利用型）で外部検定利用入試を導入する。この入試方式では以下の外部検定とスコアを出願資格として指定している。

技能	TEAP	IELTS	実用英語技能検定※		TOEFL iBT
			2015年2月～ 2016年3月 受験者	2016年4月以降 受験者 (CSE 2.0)	
総点	280	6	1級/準1級 合格者	2200	60
Reading	65	5		500	14
Listening	65	5		500	14
Writing	65	5		500	14
Speaking	65	5		500	14

※実用英語技能検定：2016年4月以降は、4技能試験が適用される1級/準1級/2級の受験者に限る。

早稲田大の採用する英検 CSE (Common Scale for English の略称) とは、試験結果を級の合否で判定していた英検にスコアを併記するための尺度である。これにより英検 5 級から 1 級までの英語力を共通のスコアで表示することが可能になった。今までは大学が英検を入試に利用する際、設定するレベルが 2 級では低すぎ、準 1 級では高すぎるということがしばしば起こっていた。それがこの CSE を活用することで、大学の希望に沿って細かくレベル設定することができる。また技能ごとにもスコア表示されるため、合計点と併せて必要な技能に比重を置いたスコア設定も可能となっている。

<明治大学>

経営学部 英語 4 技能試験活用方式 「出願資格」 + 「加点」

明治大も 29 年度入試より実施する「英語 4 技能試験活用方式」で英検 CSE2.0 を採用している。明治大の最大の特徴は優遇レベルを 3 段階に分け、それぞれに「出願資格」「加点」を設定している点である。「出願資格」としての基準点に加え、さらに高い英語力を持つ受験生を「加点」で優遇し、優秀な生徒を集めたいという大学の意向をうかがうことができる。

①出願および「外国語」試験の免除に必要なスコア (最低点)

試験の種類	総合スコア	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検 (CSE2.0)	2級または準1級 または1級の2200	530	530	530	530
TEAP	230	60	60	45	45
TOEFL iBT	57	13	13	12	12
IELTS	4.5	4.5	4.5	4.0	4.0
TOEIC (L&R + S&W)	980	325	335	140	130
		L&R 680		S&W 280	

②20 点の加算に必要なスコア (最低点)

試験の種類	総合スコア	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検 (CSE2.0)	準1級または1級の 2310	540	540	540	540
TEAP	260	65	65	50	50
TOEFL iBT	64	14	14	13	13
IELTS	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5
TOEIC (L&R + S&W)	1090	375	385	150	140
		L&R 765		S&W 300	

③30 点加算に必要なスコア (最低点)

試験の種類	総合スコア	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検 (CSE2.0)	準1級または1級の 2550	610	610	610	610
TEAP	280	70	70	60	60
TOEFL iBT	71	15	15	14	14
IELTS	5.5	5.5	5.5	5.0	5.0
TOEIC (L&R + S&W)	1180	405	415	160	150
		L&R 845		S&W 320	